

指導資料

社会 第122号

 鹿児島県総合教育センター

—小学校、特別支援学校対象—
平成25年10月発行

資料活用の技能を育成する小学校社会科の授業改善 —「基礎・基本」定着度調査を踏まえて—

平成24年度の「基礎・基本」定着度調査では、小学校第5学年の社会科の通過率が7割を越えたことにより、学習内容の定着が概ね図られていると捉えられる。しかし、観点別に見ると「資料活用の技能」の観点において、資料から読み取り、全体的な傾向を捉えたり、複数の資料を関連付けて読み取ったりすることなどに課題が見られる。また、「社会的な思考・判断・表現」の観点においても、複数の資料を比較し、読み取ったことを表現する調査問題に課題が見られる。

そこで、本稿では、調査の結果を踏まえ、児童の思考・判断・表現の基盤ともなる「資料活用の技能」の育成に着目した学習指導の工夫について述べる。

1 資料活用の技能を育成する意義

『小学校学習指導要領解説 社会編』には、第5学年の内容全体に関わる能力に関する目標について、以下のように示されている。

社会的事象を具体的に調査するとともに、地図や地球儀、統計などの各種の基礎資料を効果的に活用し、社会的事象の意味について考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。
(下線筆者)

つまり、第5学年で育成すべき能力において、資料活用の技能は、社会的な思考・判断・表現を促すために必要な技能であり、各学年の段階に応じて育成すべきものである。

2 「基礎・基本」定着度調査の通過率の低い問題からみた傾向

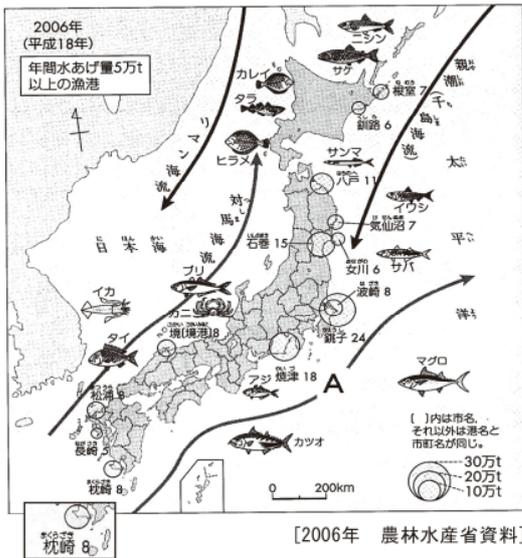
平成24年度の調査では、全30問出題されており、通過率の低かった問題は以下のとおりである。

問題番号13-(1)は、「地産地消」という知識がなければ解答できない問題であるが、それ以外の問題は、資料活用の技能が身に付いていれば解答することができる。

表1 通過率の低かった問題

順	問題番号	領域	観点	通過率
1	10-(1)	工業	知識理解	50.9%
2	6-(2)	水産業	資料活用	51.2%
3	13-(1)	運輸貿易	知識理解	53.3%
4	8-(2)	水産業	資料活用	55.1%
5	9-(1)	工業	思判表	56.2%

問題番号6-(2)は、資料1から、年間水揚量の最も多い漁港を探し出し、枕崎漁港の年間水揚量との違いを説明する問題である。



資料1 日本の主な漁港の水揚量

誤答の原因としては、銚子港の水揚量24万トンを読み取れなかったこと、あるいは、枕崎港の水揚量と比較して説明することができなかったことが考えられる。

そこで、実際の指導においては、まず、複数のデータが配置してある統計地図内の情報を読み取りやすいように、数値に着目させ、最大値や最小値を選んで印を付けさせる。次に、銚子港の水揚量が最大値であることを読み取った後、枕崎港の水揚量と比較し、何倍かを問うことで解答が可能になる。

さらに、「水揚量が多い港が集まっているのはどの辺りか。」と発問し、太平洋側の港の水揚量が多いことに気付かせる。そして、銚子港周辺の水揚げが多い要因を、銚子港沖が親潮と黒潮の合流点(潮目)になっていることと関連付けて考えさせることで、社会的な思考・判断・表現の育成にもつなげられる。

問題番号8-(2)は、資料2から、サンマが届くまでにかかった時間を読み取って計算する問題である。

◆1日目(午前10時)
気仙沼漁港に水あげされたサンマが、トラックで工場に運ばれます。

◆1日目(午後5時)
箱詰めされたサンマが保冷トラックに積みこまれて、工場を出発します。

◆2日目(午前1時)
東京の市場には、真夜中に着きます。箱をトラックから下ろして市場にならべます。

◆2日目(午前7時)
市場からスーパーマーケットや魚屋に運ばれていきます。

◆2日目(午前10時)
スーパーマーケットや魚屋にならべられます。

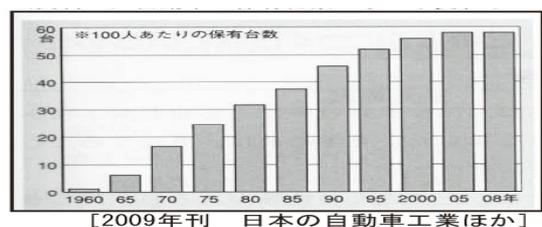
資料2 サンマが届くまでの流れ

誤答の原因としては、時系列で示した資料から必要な情報を取り出すことができなかったこと、あるいは、期日をまたいだ時間の計算に困難を感じたことなどが考えられる。

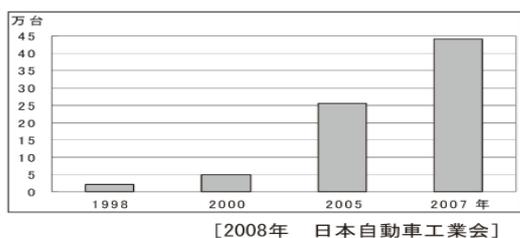
そこで、実際の指導においては、資料2の期日や時刻に下線を引くなどして、文字情報を整理し、必要な情報を取り出させる必要がある。

このように、文字の多い資料の中で、時間や価格などの数値等が複数出てきた場合は、比較して「何時間かかるか。」「何倍か。」などの視点を常に意識して計算させるなど、資料の特徴に応じて読み取っていく必要がある。

問題番号9-(1)は、資料3、資料4の二つのグラフから読み取った、全体的な傾向などの分かったことを関連付けて、学習問題という形式で文章記述する問題である。



資料3 自動車保有台数の移り変わり



資料4 ハイブリッドカーの普及台数の移り変わり

誤答の原因としては、それぞれのグラフに表されている情報を読み取る中で、全体的な傾向を捉えられていないこと、あるいは、学習問題の形式に記述することに難しさを感じているものと考えられる。

そこで、実際の指導においては、それぞれの資料について、「グラフの数値はどのように変化していますか。」などと発問し、資料3から「2005年から自動車の保有台数がほとんど変わらないこと」を、資料4からは、「2005年からハイブリッドカーの普及台数が2倍近くに急増していること」を読み取らせる。

それぞれのグラフから読み取った全体的な傾向を比較することで問題意識をもたせ、「2005年から自動車の保有台数は、ほとんど変わらないのに、ハイブリッドカーの保有台数が急増しているのはなぜだろうか。」という学習問題の記述につなげていく。その際、「～のに～のはなぜだろうか。」という学習問題の形式を示しながら記述させることで、形式に慣れることができる。

通過率の低い調査問題の分析から、資料活用の技能の重要性を意識した出題がなされているものの、授業における具体的な指導が十分ではないことが分かる。

3 資料活用の技能の系統

『小学校学習指導要領解説 社会編』には、各学年の段階において、どのような資料活用の技能を身に付けさせるかが、表2のように示されている。

表2 各学年における資料活用の技能

第3・4学年	第5学年	第6学年
必要な情報を読み取る。		必要な情報を 的確に 読み取る。
複数の資料を関連付けて読み取る。		
特徴に応じて読み取る。		
全体的な傾向をとらえる。		
必要な資料を収集する。	必要な資料を収集したり 選択したり する。	必要な資料を収集・ 選択したり 吟味したりする。
資料を整理したり 再構成 したりする。		

資料活用の技能には、「必要な情報の読み取り」、「全体的な傾向把握」、「複数の資料を関連付けた読み取り」、「資料の特徴に応じた読み取り」、「資料の収集・選択」、「資料の整理・再構成」などがある。

第6学年になると、必要な情報を「的確に」読み取ることや、収集・選択した資料を、「吟味する」技能も加わるなど、学年の段階に応じて資料活用の技能の育成を図ることが求められている。

4 資料活用の技能を段階的に育成する指導

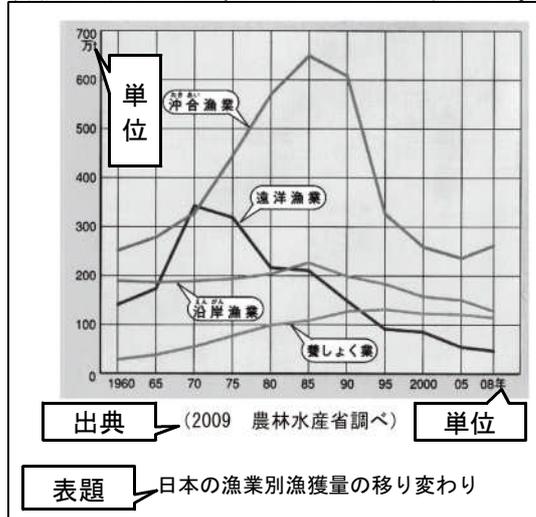
「基礎・基本」定着度調査の傾向を踏まえ、各学年で身に付けるべき資料活用の技能を高める指導の工夫について述べる。

ここでは、第5学年小単元「水産業のさかんな地域をたずねて」における指導例を示す。

(1) 必要な情報の読み取り

グラフや写真などの資料については、表題（日本の漁業別漁獲量の移り変わり）、出典（2009 農林水産省調べ）、

単位（万 t，年），横軸（移り変わった年），縦軸（漁獲量）などの基本的な情報を読み取れるように，資料が出てくるたびに児童に問うことが必要である。資料読み取りの必須事項であると言える。



資料5 グラフ及び読み取りの視点

(2) 全体的な傾向の把握

グラフの読み取りでは，特に，全体の傾向を把握することが必要である。

そこで，グラフから分かる事実の読み取りを箇条書きでノートに列挙させ，個別の傾向を把握した上で，全体の傾向把握をさせたい。その際，「増えているのか，減っているのか。」，「グラフが急に変わっているところはどこか。」などの傾向に着目させる。

資料5の場合，「養殖漁業は少しずつ増えている。」，「沖合漁業は，1985年まで増えていたが，その後，急に減り始めた。（700万トン→250万トン）」などの事実を読み取らせることができる。

(3) 複数の資料を関連付けた読み取り

読み取った事実の中から，「遠洋漁業が1970年代前半から減ってきている」ことや「沖合漁業も1985年から減ってきて

いる」ことに着目させ，「どうして急に減ったのか。」と問うことで，グラフの変化と出来事を関連付けて解釈させることができる。

教科書の記述では，「1977年ごろから世界各国は自国の水産資源を守るために，海岸から200海里（およそ370 km）の範囲の海で，外国の漁船がとる魚の種類や量を制限するようになりました。」とある。

このような教科書とグラフなど，複数の資料で読み取ったことを関連付け，沖合漁業や遠洋漁業が減少してきた原因について考えることで，読み取ったことについて検証することができる。

なお，授業展開によっては，資料集や自作資料と関連付けて説明させることも考えられる。特に，遠洋漁業が200海里問題前の1970年に急に減少していることについては，グラフの情報だけでは考えることが難しい。そこで，「オイルショックがあり，石油の価格高騰によって船の燃料費が大きな負担だったことも要因として考えられる。」などの補説により，思考・判断・表現の力を育てることにもつながることができる。

以上のような学習指導の工夫を意図的・計画的に行うことで，資料活用の技能の育成が図られ，授業改善につながっていく。

—引用・参考文献—

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』平成20年
- 鹿児島県総合教育センター 『指導資料No. 116』平成23年
- 北俊夫・片上宗二編『小学校新学習指導要領の展開 社会科編』平成20年，明治図書
(教科教育研修課)